

【保育実践論文(ソニー幼児教育支援プログラム) 審査講評】
2020年度 最優秀園
学校法人仙台みどり学園 幼保連携型認定こども園 やかまし村

子どもたちが外来種との出会いを通して、「命」と真摯に向き合い、教育目標のひとつでもある“自分も地球の中のひとつ”と感じながら、思いやりや人生の智慧を身につけられることを大切に、保育されたことが本論文から読み取れました。保育者も子どもたちと共に揺らぎ、「科学する心」を広く深く展開され、本主題「科学する心」の本質に迫る実践でした。

子どもたちが魚釣りや魚調べをしながら外来種と出会い、生きている命を絶たなければいけないこともあると知り、疑問や課題をさらに追求していく姿。保育者も、子どもたちと共に「揺らぎ」、どうするかを考え、互いに真摯に向き合い、命と葛藤していく姿。保育者自身もわからないことに遭遇しながらも、子どもと共に悩み、水族館の飼育員さんへと地域の方の知恵を借りながら保育にかえしていく姿など、子どもの声、言葉を聞き、子どもたちが興味をもったことへの探求、「もっと知りたい」を深く追求していくことの面白さ、楽しさが伝わっていかれることを大切に取り組まれています。

園内に、手作りの水族館を作り活動したり、魚拓にしたり絵を描いたりするなど、展開する中で出会う様々な葛藤も読み取ることができました。

また、年度終わりに子どもたちが作成した卒園式の言葉、「オオクチバスもありがとう」「オオクチバスのおかげでいろいろなことがわかった」には深い意味が込められています。知らずに捕えた外来種を、駆除しなければいけない現実との葛藤。その中には生き物への愛情、子ども時代からの持続可能な社会との関連性や、その視点の重要さを感じます。特に特定外来種の扱いについて自然な形で学んだことは、「科学する心」を広く深く展開する題材として有用であると捉えました<注記>。

これらの科学や倫理の本質にせまる実践が、これからの保育・教育を支える上で、きわめて重要であると高く評価されました。

<注記>オオクチバス（ブラックバス的一种）は、外来生物法（2005年施行）の「特定外来生物」に指定されており、飼育・運搬・保管・放流などは、原則として刑事罰の対象となる。